

人間はすべて生活者である。これは人種・国家・貧富・階級・性・職業・年齢・心身障害…など、一切の別をこえる。「生活(者)」とは「を規定することはむずかしい。が、衣食住をいとなみ、子をうみ・育て、病いをいやし、老い、死ぬは、生活者の生に基本であり、全体であり、普遍である。

生活者は、男女のつくる家庭で生まれ、その営みはここからはじまる。この意味で家庭は生活者の生の基盤であり、生活の基底である。これは、生活者が家庭を起点・基底として、個人として、社会人として、一瞬一瞬を生きつづけ・死につづけることである。この意味で、家庭は生死の絶体二律背反・矛盾を内包する生活者の生の原生活空間である。^(生活空間)生活者は意識・無意識をとわず誕生とともに「いま」「ここ」という時間と空間の交叉にあって、それらの制約、即ち、ちがった歴史的、社会的条件のなかで、価値をもとめて生きる。従って生活者は、価値と反価値の絶対矛盾の苦悩をもつ。単なる真・善・美はありえない。それらは偽・悪・醜を内包する。生活者がそれやれの生の場で、生と死、価値と反価値の絶対矛盾を、死をはらみつつ生へ、反価値を内包しつつ価値へと、一瞬一瞬、生きつづけることに、生活者の全体性は創造される。かくて生活者の部分は、この全体性から生まれ、これとの交流において、その部分を深め、広め、高める。それは同時に、生活者の全体性の止揚である。

生活人間学が、生活現象を対象とする学である限り、その原理・哲学は、生活者の、以上の生の二つの根源的、絶対的矛盾の認識をぬきにしてはなりたたない。